はじめに

八月号と九月号は、国際幼年教育協会編「幼児期――学習のために最もたいせつな時期」の翻訳にあてることとした。これは、同協会の機関誌「子供の教育」の最近数年間の論説の中から、選択して一つの小冊子にまとめられたものである。

国際幼年教育協会（The Association for Childhood Education International）の編集になる雑誌「子供の教育」（Childhood Education）は、米国における幼児教育専門誌を代表するものといってよい。最近、この他にも一、二種類、保育誌が見られるが、長い年月にわたって、この雑誌は、米国で唯一の保育専門誌であった。読者の中には、すでにこの雑誌について知っておられる方も多いと思うが、世界的に定評のある雑誌である。その中から最近のすぐれた論説を抜き出して作られたのがこの小冊子であるが、このような試みは、この雑誌としてははじめてである。どうしてこのような企画が、いまなされたのかというと、いくつかの背景になる事情があるようである。

そのひとつは、米国においても日本と同様に、最近、幼児教育は多くの人の関心の的になってきていること。（日本とはやや違った形であるが）第二は、幼児期から、早く教えこもうという傾向が全般に強まっていること。そのために幼児に対する圧力が強くなっていること。第三には、幼児教育界でも、新教育、進歩主義教育に対抗する論があらわれていることなどである。

「子供の教育」誌は、以前から、進歩主義教育の代表と自任している雑誌である。その冒頭には、毎号「固定したやり方を支持するのではなく、考えることに刺激を与えるために」（To Stimulate Thinking Rather than Advocate Fixed Practices）という標語が記してある。そのように、幼児を尊重し、幼児に対する柔軟な態度を説いてきた雑誌が現代に問うた一つの試みと受けとることもできるのではないかと思う。

わが国においても、最近幼児教育が多くの人の関心の的となり、幼児教育施設も普及の度を加えつつある今日、幼児教育の基本的理解をしておくことはきわめて重要である。幼児教育がたんなる早教育ではなく、確実な人間形成につながる道としてとらえなければならない。本誌が二号をあてて、この小冊子の全文の翻訳を試みたことの意義もここにある。

本誌の翻訳出版に際しては、国際幼年教育協会より、快く翻訳を承諾された。ここに記して感謝の意を表したい。

翻訳は約二十名にのぼる幼児教育の専門家の協力によるものである。短期間にこれだけのものにまとめることができたのは、翻訳者の方々の積極的な御助力の賜物である。

津守　真